フットゴルフ

会員 松久 僚成

1 社会人と言えば

2019年に入り、弁護士としての1年目が経過したが、私にとって昨年、社会人としての1年目でもあった。

勤務開始前は、社会人になった自分をイメージするのがなかなか困難であった。あえて言うのであれば、身分の説明が格段に楽になると思っていた程度である。世間では「司法修習生」を知らない方が圧倒的多数であり、司法修習生時代は人生で一番自己紹介に悩まされた1年であったと思う。

もっとも、「社会人と言えばゴルフ」という勝手なイメージは抱いており、小学生の時からサッカー筋の私も、仕事の付き合いとして、もしくは新たな趣味の一つとして、週末にゴルフ場をまわる日がいずれくるのであろうとぼんやり考えていた。ところが、社会人1年目にして早速、中学校の部活の先輩らに誘われて、ゴルフ場デビューを飾ることとなった。

ただし、フットゴルフで、である。

2 フットゴルフ

フットゴルフとは、端的にいうと、ゴルフとサッカーが融合した競技である。各プレイヤーは、各々のサッカーボールを蹴って、ホールに入れるまでの回数を競う。

私がプレーした場所は、本来は通常のゴルフをプレーするためのゴルフ場であった。フットゴルフ用のグリーンとホールが通常のゴルフ用のグリーンに脇に設けられているが、ティーグラウンドは共通である。また、私たちの前後のプレイヤーは、通常のゴルフをプレーしていた。

ホールは通常のゴルフに比べて圧倒的に大きな設計となっており、大体の方向が合っていれば入るように見えるのであるが、実際にプレーしてみると、これが想像以上に難しい。芝の具合ですぐに軌道がずれるうえ、

グリーンに乗ったあとは普通のサッカーではありえない弱さで蹴ることもある。

とはいえ、テレビのゴルフ中継で見るようなあの壮大な環境の中でサッカーボールを蹴るというのは、なかなか爽快であった。

3 引き出しを増やす

私のゴルフ場デビューは、まさかのフットゴルフによるものであった。正直、先輩に誘われるまで、その競技名すら知らなかったものである。そのような形でゴルフ場に足を踏み入れるとは、1年前の私には全く想像できなかった。

しかし、思い返してみれば、この社会人1年目の1年間は、許認可申請のために日本銀行を何度も訪問したり、偶然にも交渉の相手方が弁護修習で私の指導担当を務めておられた弁護士であったりなど、事前にどれだけ想像を膨らませていても当たらないことばかりであったと思う。

私は、最初の数年はとにかく様々な経験を積んで、自分の中の引き出しを増やしていきたいと考えている。日々の法律相談においても、初めて経験する事案に直面することや、中身をよく知らなかった法律の検討が必要になることは少なくない。そして、それは今後弁護士としてどれだけキャリアを積んでも変わらないことであると思う。その際に、類似の事例や応用できる過去の経験が自分の中にストックされていれば、最良のサービスを提供することができるはずである。

社会人1年目は、見るものすべてが新鮮であることを差し引いても、多様な経験を積むことができた。2年目も、新しい経験をたくさん積むことができると期待している。